

## ゲルマン語強変化動詞第2種の歴史の変遷 (2)<sup>46</sup>

下崎 正利

### 2.0. 各言語における歴史の変遷

1.1. から1.7. まで、各言語の文献時代の初期の状態を見てきたが、次に各言語における文献時代の初期から現代にいたるまでの変遷を辿っていくことにする。取り上げる言語は、アイスランド語、スウェーデン語、デンマーク語、ノルウェー語、ドイツ語、低地ドイツ語、オランダ語、英語、西フリジア語とし、この順で見ていく。概ね、1.2. から1.7. で扱った言語の順と一致しているが、ノルウェー語については、bokmål とデンマーク語との関係を考慮し、デンマーク語の次に回している。なお、1.1. から1.7. では、標準階梯の現在形とアオリスト現在形の両方が見られる動詞には#を付してそれを示したが、以下においてはそれは行わないこととする。

### 2.1. アイスランド語

古アイスランド語の ó, ú, ý, au, u, o, e, ö, y は、近代アイスランド語でそれぞれ /ou/, /u/, /i/, /œy/, /y/, /ɔ/, /ɛ/, /œ/, /i/ になった。古アイスランド語における母音の長短の対立は、母音の音色の対立となった。近代アイスランド語でも母音の長短の区別はあるが、これは後続子音の数で決まり、弁別的ではない。

これらの音変化により、古アイスランド語の ió (ý) – au – u – o というアプラウトは、近代アイスランド語では jó /jou/ [jou, jɔu] (ý /i/ [i:, i]) – au /œy/ [œy:, œy] – u /y/ [y:, y] – o /ɔ/ [ɔ:, ɔ] となる<sup>47</sup>。現在、このアプラウトを示す動詞には、次のものがある。

bjóða, brjóta, fljóta, frjósa, gjósa, gjóta, hljóta, hnjósa, hnjóta, hrjósa, hrjóta (springen), hrjóta (schnarchen), hrjóða, kjósa, ljósta, njóta, rjóða, sjóða, skjóta, þjóta, þrjóta

frjósa と kjósa も、現在ではこのアプラウトを行い、文法的交替を行わない形が普通である。しかしながら、別形も残されており、frjósa の過去形に freri, 過去分詞に freðin (< frerinn), kjósa の過去形に kjöri, kurum, 過去分詞に kjörinn という形が併存している。現代アイスランド語の強変化動詞第2種で文法的交替が見られるのは、これらの例においてのみである。hnjóða (säubern) はすでに古語となっている。hnjóta は、近代アイスランド語期になってから文献に登

<sup>46</sup> 「ゲルマン語強変化動詞第2種の歴史の変遷 (1)」は、『山口大学独仏文学第43号』(2021) 所収。

<sup>47</sup> g, k, sk で始まる動詞については、下記を参照のこと。

場するようになった語である。rjóða は、弱変化第2種の活用も示している。

語幹が g, k, sk で始まっている場合、ý, y の前で g, k が口蓋化し、それぞれ [c], [cʰ] となる。g, k, sk に j が続いている時も口蓋化が起こるが、この場合は j と融合し gj で [c], kj で [cʰ] となる。ただし、音素的には gj は /gj/, kj は /kj/ と分析されるので、gj, (s)kj で始まる動詞の現在語幹の母音も jó として扱っている。

古アイスランド語の iú (ý) – au – u – o というアプラウトは、近代アイスランド語では jú [ju:] (ý [i:]) – au [œy:] – u [y:] – o [ɔ:, ɔ] となる。現在、このアプラウトを示す動詞には、次のものがある。

drjúpa, fjúka, fljúga, kljúfa, krjúpa, ljúga, ljúka, rjúfa, rjúka, smjúga, strjúka, sjúga

biúga は姿を消している。古アイスランド語の lúka と súga は、古アイスランド語末期になると、まれに現在語幹において ú ではなく iú を示す例が見られるようになったが、現在では ljúka, sjúga という形のみが用いられ、lúka, súga という形は用いられなくなっている。

古アイスランド語では、語幹が g に終わる動詞の場合、過去単数語幹に -ó という形と -aug という形が併存していたが、現在では後者のみが用いられており、前者は廃れてしまっている。

f, g は ú と a, u の間で普通発音されないが、語幹末子音が g の強変化動詞第2種の現在形では、g の脱落が本来の音環境を越えて広がっている<sup>48</sup>。

語幹末の k と g は (g については脱落する場合を除く)、i の前で口蓋化し、それぞれ [c], [j] となる。k と g の後に j が続く時は、kj で [c], gj で [j] となる。語幹が g に終わる動詞は、過去分詞において -gi- [-ji-] の前で幹母音の /ɔ/ が [ɔi] という形をとる。g の後の i が脱落した形態においては、幹母音の /ɔ/ は [ɔ] である。

語幹が k, g に終わる動詞は、接続法過去複数形において語幹末子音が単数形と同じ [c], [j] となり、それぞれ kj, gj と綴られる。y は、gi, gj の前では張り母音 [i:] となるため、語幹が g で終わる動詞では接続法過去形の幹母音が他の動詞の [i:] と異なることになる。

古アイスランド語の ú (ý) – au – u – o というアプラウトは、近代アイスランド語では ú [u:] (ý [i:]) – au [œy:] – u [y:] – o [ɔ:, ɔ] となる。現在、このアプラウトを示す動詞は、lúta と súpa のみである。古アイスランド語に見られた stúpa は失われている。lúka と súga については、上述の通りである。lúta は、古アイスランド語ではまれに弱変化形も見られたが、現在は常に強変化である。

flýja は完全に弱変化第1種に、tjóa は完全に弱変化第2種へ移行している。

<sup>48</sup> Kress (1982), § 45, Anm.1 及び Anm.2 を参照のこと。

古アイスランド語において過去分詞のみが形容詞化した形で残されていたものの内、hroðenn 以外は現在まで残されている。加えて、近代アイスランド語には古アイスランド語の文献では見られなかった dofinn という語も見られる<sup>49</sup>。過去分詞由来の形容詞かどうか不確かな fúinn と lúinn も残っている。

## 2.2. スウェーデン語

後期古スウェーデン語の  $\ddot{u}$  と  $\bar{u}$  は、近代スウェーデン語ではそれぞれ [e], [u:] になる。古スウェーデン語の半母音の  $\bar{i}$  は、近代スウェーデン語では摩擦子音化し、j となる。

後期古スウェーデン語において、過去複数語幹の幹母音には  $\ddot{u}$ ,  $\bar{u}$ , 過去分詞の幹母音には  $\ddot{u}$ ,  $\bar{u}$ ,  $\ddot{o}$ ,  $\bar{o}$  というヴァリエーションが生じていたが、近代スウェーデン語ではどちらの語幹でも幹母音は  $\bar{u}$  [u:] に統一される。

過去形では、語幹の統一が起こる。過去単数語幹が過去複数形でも用いられたり、過去複数語幹が過去単数形でも用いられたりという状態を経た後、最終的には本来過去単数語幹だったものが統一された過去語幹として用いられるようになる。過去形における語幹の統一は、スウェーデン語だけでなく、アイスランド語、フェーロー語、低地ドイツ語の一部方言を除いたすべての言語で行われる。

古スウェーデン語において  $i\ddot{u} - \ddot{o} - u - u$  というアプラウトを行っていた動詞においては、すでに後期古スウェーデン語期から現在語幹の半母音  $\bar{i}$  が他の語幹にも入り込む現象が見られたが、近代スウェーデン語になるとこれが更に進み、かつて  $i\ddot{u} - \ddot{o} - u - u$  というアプラウトを行っていたすべての動詞のすべての語幹が j を伴うことになる。その結果、アプラウトが  $u$  [u:] -  $\ddot{o}$  [ø:] -  $u$  [u:] となり、アオリスト現在形を持つ動詞と同一のアプラウトとなる。両者の違いは、アプラウトを行う母音の前の j の有無のみとなる。この j も、g, s, sk, t で始まる動詞では、gj, sj, skj, tj がそれぞれ [j], [j]/[ʃ], [j]/[ʃ], [e] という発音になったため、綴りとしては存在しているが、独立した単音としては発音されない<sup>50</sup>。

$u - \ddot{o} - u$  というアプラウトを行う動詞の内、前に j を伴うものには次のものがある。

bjuda, gjuta, ljuda (lauten), ljuta, ljuga, njuta, sjuda, skjuta, tjuta

古スウェーデン語に見られた動詞の内、fiūka, \*giūsa, kiūsa, riūva, riūpa, skiūva

<sup>49</sup> 古アイスランド語の文献には出てきていないが、古ノルウェー語の文献では見ることが出来る。

<sup>50</sup> g, sk は前舌母音の前でもそれぞれ [j], [j]/[ʃ] となるため、g, sk で始まる動詞では、過去形において語頭子音の [j], [j]/[ʃ] を表わすのに j は不要であり、正書法上 j は綴られない (gjuta - göt - gjutit, skjuta - sköt - skjutit)。

は、現在では失われている。ljuda (lauten) は、弱変化第2種から移行してきた動詞である。

強変化動詞第3種の sjunga と sjunka は、それぞれ sjunga – sjöng – sjungit, sjunka – sjönk – sjunkit と変化するが、この変化には強変化動詞第2種のこのグループの影響があった可能性が指摘されている<sup>51</sup>。

u – ö – u というアプラウトを行う動詞の内、前に j を伴わないものには次のものがある。

sluta, suga, supa

古スウェーデン語に見られた動詞の内、būgha<sup>52</sup>, dūka, lūka は失われている<sup>53</sup>。luta は弱変化第2種に移行している。

duga はゲルマン祖語では第2種の過去現在動詞であったが、古スウェーデン語では、まだその痕跡が残ってはいるものの、弱変化へと移行している<sup>54</sup>。現在では更に強変化第2種へと移行している。ただし、過去分詞／完了分詞には弱変化第1種の形が用いられる。

現在, y – ö – u というアプラウトを行う動詞には次のものがある。

bryta, drypa, flyga, flyta, frysa, ryta, klyva, nypa, knyta, krypa, skryta, smyga, snyta, stryka, tryta

nypa と skryta は、近代スウェーデン語になってから文献に現れるようになった語である。knyta と snyta は弱変化第1種から移行してきた動詞である。

drypa と nypa の過去分詞／完了分詞には、強変化形と並んで弱変化第1種の形が存在している。

次の動詞は、現在語幹の幹母音が y, 過去語幹の幹母音が ö であるが、過去分詞／完了分詞には弱変化第1種の形しか存在していない。

dyka, fnysa, lyda (lauten), nysa, rysa, ryka, strypa

<sup>51</sup> Wessén (1970), § 199, 3を参照のこと。

<sup>52</sup> 近代スウェーデン語の buga は弱変化で、中低ドイツ語の būgen を借用したものであり、古スウェーデン語の強変化動詞第2種の būgha を継承するものではない。なお、中低ドイツ語 būgen の借用はすでに古スウェーデン語期におこなわれているが、古スウェーデン語では借用語の方の būgha の過去形は būg(h)de で、現在とは形態が異なる。Noreen (1904), § 529, Anm.7を参照のこと。

<sup>53</sup> 古スウェーデン語において強変化第2種への帰属が不確かであった dūva も失われている。

<sup>54</sup> 古スウェーデン語において duga の過去形は dug(h)pe, 過去分詞は doghit である。過去現在動詞であった名残としては、後期古スウェーデン語において、直説法現在3人称複数形に dugu, dog(h)o という別形が見られる。Noreen (1904), § 553, 1及び Anm.1を参照のこと。

語幹が d で終わる *lyda* は、過去分詞／完了分詞で幹母音が短母音化する。

*dyka* と *fnysa* は、近代スウェーデン語期になってから文献に現れるようになった語である。*dyka* と *lyda* (*lauten*) は低地ドイツ語からの借用語である<sup>55</sup>。*strypa* は弱変化第1種から移行してきた動詞である。*fnysa* は、過去形で強変化形と弱変化第1種の形が併存している。

語幹が r もしくは子音+r もしくは子音+l で始まる動詞は、すべて現在語幹の幹母音が y であるが、これ以外の形で始まる動詞にも現在語幹の幹母音が y のものがあり、近代スウェーデン語では y の分布の規則性が崩れている。次の動詞がこれに当たる。

*dyka, fnysa, nypa, knyta, nysa, smyga, snyta*

すでに述べたように、*dyka* と *lyda* (*lauten*) は低地ドイツからの借用語で、*knyta* と *snyta* は弱変化第1種から移行してきた動詞である。*nypa* と *smyga* は、i-ウムラウトをした母音が一般化したものである<sup>56</sup>。*nysa* もおそらく同様であろう。*fnysa* の y がどこから来ているのかは、判断が難しい。上述のように、過去分詞が弱変化第1種形で、過去形にも弱変化第1種形が併存しており、またアイスランド語の *fnýsa* が弱変化第1種であることからすると、弱変化第1種から移行してきたためである可能性が考えられる。デンマーク語の *fnýse* は強弱両変化をしている（以下参照のこと）。中英語の *fnēse* は強変化である。

古スウェーデン語において過去分詞のみが形容詞化して残っていたものの内、*luden* と *rutten* は現在でも残っている。*duvin* は失われている<sup>57</sup>。

活用の際の文法的交替については、現在では全く見られなくなっている。

### 2.3. デンマーク語

前期中デンマーク語において、*iū* はほとんどの場合 *y* になるが、標準階梯の現在語幹を持つ強変化動詞第2種では、例外無くすべての動詞の現在語幹の幹母音が *y* になる。この後、更に様々な変化が加わり、スウェーデン語との差異がますます拡大していく。

過去語幹は、スウェーデン語と同様、過去単数語幹の *ø* [ø:] の方で統一された。この *ø* は、かなり多くの動詞において、過去分詞の語幹にまで入り込んでいく。*ø* の後に *g* が続くと、*øg* で [oi] となった。

語幹が d に終わる動詞の過去分詞の中性形においては、本来の2音節の過去

<sup>55</sup> *dyka* も失われた *dūka* も、中低ドイツ語の *dūken* を借用したものだが、*dyka* は *dūka* と直接的にはつながらない。

<sup>56</sup> Noreen (1904), § 529, 1. 及び § 561, Anm.4を参照のこと。

<sup>57</sup> 強変化動詞第2種の過去分詞に由来するのかどうか不確かな *lūin* も失われている。

分詞と並んで、接尾辞の母音の脱落した1音節の形が形成されるようになる。開音節の短母音に対しては長母音化が起るため、1音節の強変化過去分詞と2音節の強変化過去分詞とでは、幹母音の長短に差異が生じることとなるが、2音節で長い幹母音を伴う強変化過去分詞は失われていく。

デンマーク語では、かなりの動詞が、とりわけ過去分詞において弱変化の別形を持つようになる。これは、弱変化第1種の形のこともあれば弱変化第2種の形のこともあり、また両方の形態を持っている動詞もあった。

現在、デンマーク語では、語幹形成法が整理され、強変化動詞第2種は大きく5つのグループに収斂している。

1つ目のグループは、y [y:] - ø [ø:] - u [u] というアプラウトを行うもので、語幹が d で終わる動詞の一部が属している。このグループの動詞の過去分詞は、接尾辞の母音の脱落した1音節の強変化過去分詞である (-udt)。このグループには、次の動詞が属している。

byde, bryde, skyde, fortryde

2つ目のグループは、弱変化の過去分詞を持ち、y [y:] - ø [ø:] - y [y:]/[y] というアプラウトを行う動詞である。語幹が d で終わる動詞の内、1つ目のグループに属していないものと、fryse 以外の語幹が s で終わる動詞がこのグループに属している。次の動詞がこれに当たる。

flyde, fnyse, gyse, gyde, lyde (lauten), lyde (gehorchen), nyse, nyde, skryde, snyde, betyde

skryde と betyde が弱変化第2種の過去分詞を持つ以外、すべて弱変化第1種の過去分詞を持つ。過去分詞が弱変化第1種の形の場合、-dt の前で y は短母音化する ([y])<sup>58</sup>。

lyde (lauten) は、中低ドイツ語からの借用語である。gyse と nyse の過去形には、弱変化第1種の別形がある。lyde (gehorchen) は本来、弱変化第1種であったのだが、過去形が強変化第2種の形のものに置き換わっている。過去分詞が弱変化第2種の skryde は、過去形に弱変化第2種の別形を持っている。betyde は、弱変化第1種だったものが弱変化第2種へと移行し、更に過去形が強変化第2種の形に置き換わっている。

3つ目のグループは、y [y:] - ø [ø:] - ø [ø:] というアプラウトを行うもので、fyge と krybe がこれに属している。過去分詞の ø は、過去形の幹母音が過去分詞の語幹に入り込んだものである。fyge は、次の4つ目のグループのアプラウ

<sup>58</sup> Hansen (1962), 360頁を参照のこと。

トも行う。

4つ目のグループは、すべてかつて語幹が *g* で終わっていた動詞で *y* [y:] - *øg/øj* [oi] - *øg/øj* [oi] というアブラウトを行う。次の動詞があげられる。

flyve, fyge, lyve, ryge, smyge, stryge

*g* [ɣ] は、母音間あるいは語末で母音の後にあり、先行母音が *y* [y:] で、これが長母音のまま保持されている時、一部 *v* に変化し、この変化を受けなかった *g* は発音されないのが普通になった<sup>59</sup>。*g* が *v* に変化した動詞では、過去形と過去分詞の幹母音が *øj* と綴られる。

過去分詞の幹母音 *øg/øj* [oi] は、3つ目のグループと同様、過去形の幹母音が入り込んだものである。

*smyge* は弱変化第2種の変化もするが、こちらの方が古い変化形で、強変化形はスウェーデン語やノルウェー語の影響により形成されたものである。

5つ目のグループに属するのは *fryse* の1語のみであり、*y* [y:] - *ø* [ø:] - *o* [o] というアブラウトを行う。過去分詞では、例外的に幹母音の長母音化が起こっていない。また、過去分詞の幹母音が [u] ではなく *o* [o] であるが、デンマーク語では短母音の開口度が高まる傾向が強く、これもその1例である<sup>60</sup>。

古デンマーク語と古スウェーデン語の間の語彙的差異は、あったとしてもさほど大きなものではなかったと考えられるので、強変化動詞第2種の語彙の変遷を、古スウェーデン語と現代デンマーク語を比較することにより見てみると、以下の語の対応語が現代デンマーク語では見られなくなっている。

būgha, drȳpa, dūka, liūta, kliūva, liūsta, lūka, riūva, riūsa, riūpa, skiūva, slūta, sūpa, þiūta

*kyse*<sup>61</sup>, *lude*, *syde*, *suge* は、弱変化に移行している。すべて、第2種の変化をする。*būgha* と *kliūva* の対応語は、本来使役動詞である *bøje*, *kløve* に、*drȳpa*, *dūka*, *lūka*, *skiūva*, *slūta* の対応語は、強意動詞の *dryppe*, *dukke*, *lukke*, *skubbe*, *slutte* に取って代わられている。これらもすべて弱変化第2種の変化をする。*dryppe*, *dukke*, *slutte* は低地ドイツ語からの借用語である。

次にあげる現代デンマーク語の強変化動詞第2種は、古スウェーデン語においては対応語が見られない、あるいは対応語は存在しているが強変化第2種ではないものである。

<sup>59</sup> Hansen (1971), 374頁を参照のこと。

<sup>60</sup> Hansen (1962), 42頁を参照のこと。

<sup>61</sup> *kyse* は、意味の変化が大きく、現在では „erschrecken“ の意味で用いられている。

fnyse, lyde (lauten), lyde (gehorchen), skryde, snyde, betyde

すべて現代スウェーデン語に対応語が見られる。fnyse, lyde (lauten), skryde, snyde は、現代スウェーデン語の対応語も強変化第2種である（上記参照のこと）。現代スウェーデン語の lyda (gehorchen), betyda は、現代デンマーク語の lyde (gehorchen), betyde と異なり、弱変化第1種のままである。

sluge は中低ドイツ語からの借用語であり、現在、弱変化第1種の活用をするが、かつては強変化第2種や弱変化第2種の過去形も見られた。スウェーデン語の対応語 sluka は、弱変化第2種である。現在は失われてしまっているが、弱変化動詞 knyge の過去形にも強変化第2種の別形が存在していた。

弱変化への移行や語彙そのものの消失により、デンマーク語にはアオリスト現在形を持つ強変化動詞第2種が無くなっている。

過去分詞のみが形容詞化して残っている例としては、doven, låden, rådden があげられる。

活用の際の文法的交替に関しては、完全に失われている。

## 2.4. ノルウェー語<sup>62</sup>

まず、古ノルウェー語から現代ノルウェー語に至るまでに起こった音変化の内、強変化動詞第2種に関連したものをあげておく。開音節の短母音は長母音化した。古ノルウェー語の *ú* は *u* [u:] になった。 *u* は、短母音のまま保持された場合には、たいてい *u* [u] になった。 *ó* と長母音化した *ø* は、たいてい *o* [u:] になった。 *au* は *nynorsk* では *au* [æu] になったが、 *bokmål* ではデンマーク語の *ø* に置き換えられる。 *ø* の後に *g* が続くとデンマーク語では *øg/øj* [oi] になったが、 *bokmål* では *øy* [øy] になった。 *y* [y:, y] の前で *g* は [j] に、 *sk* は [ʃ] になった。語頭の *lj* においては、 *l* が発音されなくなった。

*bokmål* における強変化動詞第2種の語幹形成法は、当然のことながらデンマーク語のそれと非常に近く、やはり5つのグループにまとめることが出来る。1つ目のグループのアプラウトは、ノルウェー語では *u* が *u* [u] となったため、 *y* [y:] - *ø* [ø:] - *u* [u] となる。語幹が *d, t* に終わる動詞の内、次の動詞がこのグループに属している。デンマーク語と完全に属している動詞が一致している。

byde, bryte, skyte, fortryte

*skytte* においては、現在語幹の語頭音 [ʃ] が過去形にも入り込んでいく (*skjøt*)。過去分詞では [sk] のままである (*skutt*)。 *byde* には *by* という短縮形が存在し

<sup>62</sup> *bokmål* に関する記述は、旧正書法に基づいている。註で Holmes/Enger (2018) の記載内容としてあげているのが現行規則である。



ているが、by は弱変化で by – bydde – bydd と変化する<sup>63</sup>。

2つ目のグループのアプラウトは、bokmål でも y [y:] – ø [ø:] – y [y:]/[y] である。語幹が d, t で終わる動詞の内1つ目のグループに属していないものと、fnyse, fryse 以外の語幹が s に終わる動詞がこのグループに属している。具体的には、次の動詞である。

flyte, gyse, gyte, lyde (lauten), lyde (gehorchen), nyse, (ryte (herausspringen)),  
(ryte (schnarchen)), nyte, (ryte (brüllen)), skryte, snyte, tyte

デンマーク語とほぼ共通しているが、デンマーク語には見られない tyte が見られる。ryte (herausspringen), ryte (schnarchen), ryte (brüllen) は方言の語彙である。bety は bokmål では弱変化で、bety – betydd – betydd と変化する。

gyse と gyte においては、現在語幹及び過去分詞の語頭音 [j] が過去形にも入り込んでおり、両動詞の過去形はそれぞれ gjøs, gjøt である。

gyse, gyte, lyde (lauten), lyde (gehorchen), nyse, skryte, snyte, tyte は、過去形に弱変化第1種の別形を持つ。

過去分詞は、すべての動詞が弱変化第1種の形をしている。lyde (lauten) と lyde (gohorchen) はデンマーク語風の lydt という過去分詞と並んで、lydd という過去分詞も持っている。デンマーク語では、skryde の過去分詞は弱変化第2種の形をしているが、bokmål の skryte の過去分詞は弱変化第1種の形である。過去分詞の幹母音は、語幹が d, t に終わっている場合は [y]、語幹が s で終わっている場合は [y:] である。

3つ目のグループのアプラウトは、デンマーク語と同様、y [y:] – ø [ø:] – ø [ø:] である。このアプラウトを行う動詞には、次のものがある。

fyke, fnyse, klyve (klettern)<sup>64</sup>, klype, krype, ryke, smyge, stryke

klyve (klettern), klype は、デンマーク語には見られない動詞である。ノルウェー語では母音間及び語末で母音の後の k がデンマーク語のように g にならず k のまま保持されたので、ryke と stryke はこのグループに属し、fyke も y [y:] – ø [ø:] – ø [ø:] というアプラウトしか示していない。smyge は語幹が g で終わっているが、このグループである。デンマーク語の fnyse は2つ目のグループに属しているが、bokmål の fnyse はこのグループである。fnyse, klyve (klettern) は弱変化第1種の変化も示す。

4つ目のグループは、bokmål では y [y:] – øy [øy] – øy [øy] というアプラウト

<sup>63</sup> Holmes/Enger (2018) では、by しか記載されておらず、byde という形はあげられていない。また、by は by – bøy – bydd と活用するとされている (218頁及び221頁)。

になり、fly (fliegen)<sup>65</sup>と lyve/lyge<sup>66</sup>が属している。

fly (fliegen) の過去分詞には、flydd という弱変化の別形がある。fly (fliegen) は、現在語幹と過去分詞の別形の flydd が、fly (fliehen) の現在語幹、過去分詞と同形となっている。

5つ目のグループに属するのは、デンマーク語と同様、fryse の1語のみであり、y [y:] - ø [ø:] - o [ɔ] というアプラウトを行う。

bokmål の強変化動詞第2種の中には、過去形に西ノルド語的な au [æu] を幹母音とする別形を持つものがある<sup>67</sup>。次の動詞がそれに当たる。

byde, bryte, fly, flyte, fryse, fyke, nyse, (ryte (herauspringen)), (ryte (schnarchen)), klyve (spalten), krype, lyge, nyte, ryke, (ryte (brüllen)), skyte, smyge, stryke, tyte

skyte の過去形の幹母音が au の場合、語頭音は sk [sk] のままである。

かつて強変化第2種であった動詞の内、fly (fliehen), kyse, lute, syde, su(ge), supe は弱変化に移行している。fly (fliehen) は fly - flydde - flydd と変化、kyse, su(ge), supe は弱変化第1種の変化、syde は弱変化第2種の変化、lute は弱変化第1種と弱変化第2種の変化の両方を示している。suge と supe には、過去形に幹母音が au の強変化の別形が存在しており、かつてアオリスト現在形を持つ強変化動詞第2種であった痕跡が残されている。

形容詞化した過去分詞としては、doven と lodden が見られる。

活用の際の文法的交替は、デンマーク語と同様、失われている。

nynorsk では、標準階梯に由来する現在語幹を持つ強変化動詞第2種のアプラウトは、すべて y [y:] - au [æu] - o [u:] である。このアプラウトを示す動詞には次のものがある。

byde, bryte, drype, fyke, fly(ge), flyte, fryse, gyte, lyte, nyse, (ryte (herauspringen)), (ryte (schnarchen)), kjose, klyve (spalten), krype, lyge, nyte, ryke, (ryte (brüllen)), syde, skyte, smyge, stryke, tyte, fortryte

lyte には ljote, lyge には ljuge, syde には sjode という別形が存在している<sup>68</sup>。

<sup>64</sup> 同書221頁では、klyve (klettern) はあげられておらず、klyve (spalten) の方があげられている。

<sup>65</sup> Haugen (1965) では、-ge の脱落していない flyge という形もあげられており、flyge - flaug - fløyet と活用すると記述されている。

<sup>66</sup> lyve/lyge には、ljuge という別形もある。語頭音については、註68を参照のこと。

<sup>67</sup> Holmes/Enger (2018), 221-222頁では、lyde ((er-)tönen), skryte 以外の過去形の幹母音が ø の動詞は、過去形に幹母音が øy の別形を持つとされている。なお、lyde (gehorchen) は掲載されていない。

<sup>68</sup> j の前の l は発音されないので、l の後に j が続く形態と j が続かない形態とでは、語頭音が異なる。

ljote, ljuge, sjode の現在形はそれぞれ lyt(er), lyg(er), syg(er) である。flyge には fly という短縮形が存在しているが、過去形及び過去分詞で語幹末の g が脱落することはない。

drype, gyte, tyte は、弱変化第1種の変化もする。byde には by という短縮形が存在しているが、これは弱変化である (by – bydde – bydd)。

アオリスト現在形を持つ強変化動詞第2種は、suge と supe の2語が現在に至るまで強変化動詞第2種として残っている。u [u:] – au [æu] – o [u:] というアプラウトを行い、現在形の幹母音は y [y:] である。

fly (fliehen) は、弱変化となっている (fly – flydde – flydd)。lyde/ljode (lauten), lyde/ljode (gehorchen), klype, lute, skryte, snyte も弱変化で、ljode (lauten), ljode (gehorchen) が第2種の外は、lyde (lauten), lyde (gehorchen) も含め、すべて第1種の変化をする。

古ノルウェー語と古アイスランド語は語彙の上でほとんど差が無いので、古アイスランド語と nynorsk を比べてみると、次の動詞が失われている。

biúga, dúfa, giósa, hnióða, hriósa, hrióða, húka, líosta, lúka, rióða, riúfa, stúpa, tíóa

lúka は強意動詞の lukke に置き換えられている。

逆に、古アイスランド語に見られないが nynorsk には見られる動詞として、ryte (brüllen) があげられる。

形容詞化した過去分詞については、doven と loden が残されている。hroðenn と snoðenn は失われている<sup>69</sup>。

活用における文法的交替は、nynorsk でも見られなくなっている。

## 2.5. ドイツ語

中高ドイツ語では、古高ドイツ語の io, iu [iu] がそれぞれ ie, iu [y:] になる。

古高ドイツ語の io (iu [iu]) – ou – u – o というアプラウトは、中高ドイツ語では ie (iu [y:]) – ou – u – o となる。このアプラウトを行う動詞としては、次のものがある<sup>70</sup>。

biegen, triegen, triefen, vliegen, klieben, kriechen, kriepen, liegen, liechen (pflücken, rupfen), riechen<sup>71</sup>, schieben, sliechen, sliefen, smiegen, stieben, striefen

<sup>69</sup> 過去分詞由来の形容詞かどうか不確かであった fúenn と lúenn も失われてる。

<sup>70</sup> lúchen (schließen) の別形に liechen があるが、これはここに加えていない。

<sup>71</sup> riechen には中部ドイツ語に rúchen という別形があるが、これは以下であげる û – ô – u – o というアプラウトを示す動詞には加えていない。

この他、文献には残されていないが、smiechen という動詞が存在していた可能性がある。古高ドイツ語と比べてみると、hiofan が失われており、kriepen, sliechen, striefen が新たに加わっている<sup>72</sup>。

古高ドイツ語の io (iu) – ö – u – o というアプラウトは中高ドイツ語では ie (iu) – ô – u – o となる。このアプラウトを行う動詞としては、次のものがあげられる。

biezen, bieten, verbliehen, briezen, vliehen, vliezen, vriesen, giezen, griezen, liezen, niesen, kiesien, verliesen, niezen, rieten, riezen, siedien, schiezen, schrieten, sliezen, spriezen, stiezen, ziehen, diezen, -driezen

この他、文献資料で確認はできないが、kliezen, striezen という動詞が存在していた可能性がある。古高ドイツ語にみられた動詞の内、briodan, -(h)niotan, (h)riosan, -liotan が失われている。逆に新たに文献に現れるようになった動詞として、verbliehen, briezen, rieten, schrieten, spriezen, stiezen があげられる。

vriesen, niesen, kiesien, verliesen, siedien, ziehen においては、文法的交替が見られる。vriesen, kiesien, verliesen は、方言によっては文法的交替が平均化した形も見られる。vriesen, verliesen では vrieren, verlieren という形が見られることがあり、kiesien の場合は、過去複数語幹と過去分詞の語幹で r ではなく s を持つ形が見られることがある。

古高ドイツ語の iu – ou – ū – û というアプラウトは、中高ドイツ語では iu – ou – û – û となるが、過去複数語幹と過去分詞の語幹では幹母音が û の代わりに iu, ou となることがある。中部ドイツ語では、現在語幹の幹母音が û となる<sup>73</sup>。このアプラウトを示す動詞は、以下の通りである。

biuwen, bliuwen, briuwen, niuwen, riuwen, kiuwen, ziuwen, triuwen

biuwen は、一応このグループに入れてあるが、現在語幹の幹母音は û あるいは ou が普通であり、過去形も弱変化形しか見られない。過去分詞には gebûwen, gebouwen という強変化形と gebûwet, gebouwet という弱変化形が並存している。briuwen, ziuwen<sup>74</sup>, triuwen は、中高ドイツ語期になってから文献に現れる動詞である。

<sup>72</sup> kriepen は kriechen の、sliechen は sliefen の別形である。

<sup>73</sup> 中部ドイツ語における現在語幹の幹母音が û の形に対し、û – ou – û – û という特別なアプラウトのグループは設定しないこととする。

<sup>74</sup> ziuwen は、中部ドイツ語の文献にしか残されておらず、Lexer (1992 [1872-1878]) では zûwen という形を見出しに用いている。BMZ の見出しは ziuwe (zûwe) となっている。

古高ドイツ語の  $\bar{u}-ou-u-o$  というアプラウトは、中高ドイツ語でもそのまま保持され、次の動詞がこのアプラウトを行う。直説法現在2・3人称単数形では、 $i-$ ウムラウトにより幹母音が  $iu$  となる。

( $t\bar{u}chen$ ),  $l\bar{u}chen$  (schließen),  $sn\bar{u}ben$ ,  $sn\bar{u}fen$ ,  $s\bar{u}gen$ ,  $s\bar{u}fen$

$t\bar{u}chen$  は、 $betochen$  という過去分詞に強変化の名残が見られるのみで、弱変化に移行している。 $sn\bar{u}ben$  と  $sn\bar{u}fen$  は、中高ドイツ語期に入ってから文献に現れるようになった動詞である。

古高ドイツ語で  $\bar{u}-\bar{o}-u-o$  というアプラウトを示していた  $hr\bar{u}san$  は、中高ドイツ語では失われる。中高ドイツ語でこのアプラウトを示す動詞は文献に残されていないが、 $sn\bar{u}zen$ ,  $sn\bar{u}den$  という動詞が存在していた可能性がある。

初期新高ドイツ語では、アクセントの有る開音節における短母音が長母音化する。ただし、この変化には例外がかなりあり、 $t$ ,  $m$  の前では長母音化が起こらないことが多い。中高ドイツ語の  $ie$  は初期新高ドイツ語期に  $ie$  [ $i:$ ] となり、中高ドイツ語の  $ou$ ,  $\hat{u}$  は  $au$  へ、 $iu$  は  $eu$  へと変化していく。

初期新高ドイツ語期の初期、中部ドイツ語では、不定詞の語幹が  $ie$  の強変化動詞第2種において、直説法現在1人称単数形の幹母音が  $iu$  から  $ie$  へと変化する。この変化は、16世紀になると、上部ドイツ語地域にも広がっていく。同じ頃、現在語幹の幹母音を平均化し  $ie$  で統一する動きが出てくるが、初期新高ドイツ語末期には、非常に広い地域でこの平均化が完了する。

中高ドイツ語期、強変化動詞第2種の過去単数語幹の幹母音には  $\hat{o}$  と  $ou$  の2つがあったが、初期新高ドイツ語では平均化が起こり、 $\bar{o}$  の方で統一される。また、過去単数語幹と過去複数語幹の間、更には過去形と過去分詞の間でも幹母音の平均化が起こってくる。これらの平均化により、初期新高ドイツ語期の末期には、語によっては母音の長短にヴァリエーションがあるものの、過去形と過去分詞の幹母音の音色がほぼ  $o$  で統一された状態となる。過去形と過去分詞の幹母音の音色がともに  $o$  となるアプラウトは、初期新高ドイツ語期、強変化動詞第3種から第6種のかかなりの数の動詞にも生じ、ドイツ語の特徴の一つとなっているが、個々の動詞におけるこのアプラウトの成立過程については、本稿では扱わないこととする。

mhd.  $triegen$  と mhd.  $liegen$  には、初期新高ドイツ語期、それぞれ  $trug$ ,  $lug$  に対する類推から、 $trügen$ ,  $lügen$  という別形が生じてくる。 $lügen$  の場合、強変化第5種の  $liegen$  と区別しようとする意図が大きく働いている。また、 $triegen$  の別形の  $trügen$  が形成される際には、類義語であることから、この新しい  $lügen$  という形も影響を及ぼしている。

新高ドイツ語期になると、不定詞の幹母音が  $ie$  の動詞の現在語幹において

見られた ie と eu の交替が完全に平均化され、ie に統一される。また、すべての動詞において過去形及び過去分詞の幹母音の長短が定まり、強変化動詞第2種は両幹母音がともに [ɔ] の動詞と [o:] の動詞に分かれることになる。前者に属するのは、語幹末子音が高地ドイツ語子音推移によりゲルマン祖語の無声閉鎖音から生じた二重摩擦音であったもの及び *sieden* で、それ以外の動詞は後者に属す。大まかに言って、過去分詞の幹母音の長さでそろえられているが、過去形と過去分詞の語幹が /ʌ/ で終わる *sieden* と *bieten* は、*sieden* が [ɔ] で統一されたのに対し、*bieten* は [o:] で統一された。

現在、ie – o [ɔ] – o [ɔ] というアプラウトを示す動詞には、次のものがある。

*fließen, gießen, kriechen, genießen, riechen, sieden, schießen, schliefen, schließen, sprießen, triefen, verdrießen*

*triefen* と *sieden* は弱変化もし、*triefen* は弱変化が普通となっている。

ie – o [o:] – o [o:] というアプラウトを示す動詞には、次のものがある。

*biegen, bieten, fliegen, fliehen, frieren, kiesen, klieben, verlieren, schieben, schrieben, stieben, ziehen, wiegen*

*wiegen* は本来強変化第5種であるが (mhd. *wēgen*)、過去形及び過去分詞の幹母音が *o* [o:] になった上、現在語幹において、直説法現在2・3人称単数形の幹母音が一般化し、強変化第2種と同一のアプラウトとなったものである<sup>75</sup>。*klieben, schrieben, stieben* は弱変化もする。*schrieben* は *schnauben* の中部ドイツ語形であり、弱変化が普通である。

*trügen, küren, lügen* は *ü* [y:] – *o* [o:] – *o* [o:] というアプラウトを行う。*trügen* と *lügen* の場合、古い *triegen, liegen* は用いられなくなっている。*küren* は *Kür* からの派生語で、本来弱変化であり、現在でも普通弱変化であるが、*kiesen* の影響で強変化を示すことがある。

現在、*au* – *o* [o:] – *o* [o:] というアプラウトを示す動詞には、*schrauben, schnauben, saugen* の3語があり、すべて直説法現在2・3人称単数形でウムラウトしない。*schrauben* と *schnauben* は弱変化が普通である。*schrauben* は、中高ドイツ語では弱変化第2種である (*schrüben – schrübete – geschrübet*)。*schnauben* は、直説法現在2・3人称単数形でウムラウトしている形も残されている。*saugen* は、強変化が普通だが、まれに弱変化形も見られる。*saugen* は、かつては直説法現在2・3人称単数形でウムラウトしたが、*säugen* と区別するためにウ

<sup>75</sup> 中高ドイツ語の *wēgen* からは *wiegen* と並んで *wägen* も形成されている。

ムラウトが排除された。

saufen は、au - o [ɔ] - o [ɔ] というアプラウトを行う。このアプラウトを行うのは saufen の1語のみである。tauchen は完全に弱変化に移行している。saufen は、直説法現在2・3人称単数形でウムラウトするが、かつてはウムラウトしていない形も見られた。

中高ドイツ語期に見られた動詞の内、次のものは現在までに失われている。

biezen, verbliehen, briezen, griezen, niuwen, kriepen, liechen, liezen, lûchen, rieten, riezen, riuwen<sup>76</sup>, schrieten, sliechen, stiezen, striefen, ziuwen, triuwen, diezen

次の動詞は、完全に弱変化に移行している<sup>77</sup>。

bleuen, brauen, bauen, niesen, kauen, schmiegen, schnaufen

中高ドイツ語期、語幹が w に終わっていた動詞は、現在失われているか、あるいは弱変化に移行している。そのため、iu - ou - û - û というパターンのアプラウトは継承されていない。

次の動詞は、現在では強変化形しか見られないが、かつては弱変化の別形が存在していた。

biegen, kiesen, lügen, verlieren, sieden, sprießen, saufen

活用の際の文法的交替は、kiesen, sieden, ziehen においてまだ見ることができる。どの動詞も、過去形の語幹末子音は、過去複数語幹の方のそれとなっている。frieren と verlieren では語幹末子音が r で統一され、文法的交替が排除されている。

すでに述べたように、初期新高ドイツ語期から、本来強変化第3種～第6種である動詞の一部においても、過去形と過去分詞の幹母音として o が見られるようになるが、強変化動詞第2種と全く同じアプラウトを行う wiegen を除くと、次の動詞が現在、過去形及び過去分詞の幹母音が o となるアプラウトを示している<sup>78</sup>。o の長さは、現在語幹の幹母音の長さとも一致する。

<sup>76</sup> reuen は、強変化の mhd. riuwen < ahd. (h)riuwan ではなく、弱変化の mhd. riuwen < ahd. (h)riuwōn につながる。

<sup>77</sup> brauen, kauen は、中部ドイツ語形の mhd. brūwen, kūwen に由来する。

<sup>78</sup> 過去形及び過去分詞の幹母音が現在ともに o である動詞以外にも、過去分詞の幹母音が o の動詞の中にはかつて過去形に幹母音が o の別形を持つものがあつた。

- e [ɛ] – o [ɔ] – o [ɔ]  
fechten, flechten, melken, quellen, schmelzen, schwellen, dreschen
- i [i] – o [ɔ] – o [ɔ]  
glimmen, klimmen
- ö [œ] – o [ɔ] – o [ɔ]  
löschen
- a [a] – o [ɔ] – o [ɔ]  
schallen
- e [e:] – o [o:] – o [o:]  
heben, pflegen, scheren, weben, bewegen
- ä [ɛ:] – o [o:] – o [o:]  
gären, wägen
- ö [ø:] – o [o:] – o [o:]  
schwören

これらの動詞の内、次のものは強変化と弱変化の両方を示している。

melken; glimmen, klimmen; schallen<sup>79</sup>; pflegen<sup>80</sup>, scheren<sup>81</sup>, weben<sup>82</sup>, bewegen<sup>83</sup>;  
gären, wägen

続く

<sup>79</sup> schallen の過去形は、弱変化形が普通であり、過去分詞は弱変化形しか存在していない。それに対し、erschallen の過去形は強変化の erscholl が普通であり、過去分詞も erschallt と erschollen の両方が用いられている。verschollen は、この形で形容詞として固定化している。

<sup>80</sup> pflegen は、強変化形はまれであり、„sich sorgend um jemanden bemühen“ 及び „die Gewohnheit haben, etwas Bestimmtes zu tun“ という意味の時は常に弱変化である。

<sup>81</sup> scheren は普通強変化であり、弱変化形はまれである。

<sup>82</sup> weben は、比喩的な意味で用いられている場合はたいてい強変化だが、本来の意味で用いられている場合は弱変化である。

<sup>83</sup> bewegen は、„veranlassen“ という意味の場合に限り強変化である。



「ゲルマン語強変化動詞第2種の歴史の変遷 (1)」に対する訂正

註18

訂正前

古デンマーク語では、iū は l の前にある時、及びその他若干のケースを除き、ȳ になる。強変化動詞第2種で語幹が l に終わるものは無いので、古デンマーク語では、強変化動詞第2種の現在語幹の幹母音は常に ȳ である。

訂正後

デンマーク語では、前期中デンマーク語の時期に、iū は l の前にある時、及びその他若干のケースを除き、ȳ になる。強変化動詞第2種で語幹が l に終わるものは無いので、前期中デンマーク語において強変化動詞第2種の現在語幹の幹母音は、標準階梯である場合、常に ȳ である。

参考文献

(「ゲルマン語強変化動詞第2種の歴史の変遷 (1)」及び「ゲルマン語強変化動詞第2種の歴史の変遷 (2)」で用いたもの。)

- Allan, Robin and Philip Holmes and Tom Lundskaer-Nielsen 1995: Danish, a comprehensive grammar, London and New York, Routledge.
- Árnason, Kristján 2011: The Phonology of Icelandic and Faroese, Oxford University Press.
- Benecke, Georg Friedrich, Wilhelm Müller u. Friedrich Zarncke 1990: Mittelhochdeutsches Wörterbuch, 3 Bde., Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1854-1866, Stuttgart.
- Bosworth, Joseph and T. Northcote Toller <sup>11</sup>1991: An Anglo-Saxon dictionary, Oxford University Press.
- Boutkan, Dirk and Sjoerd Michiel Siebinga 2005: Old Frisian etymological dictionary, Leiden.
- Braune, Wilhelm <sup>15</sup>2004: Althochdeutsche Grammatik 1. Laut- und Formenlehre, bearb. von Ingo Reiffenstein, Tübingen.
- <sup>20</sup>2004: Gotische Grammatik, neu bearbeitet von Frank Heidermanns, Tübingen.
- Bremmer Jr., Rolf H. 2009: An introduction to Old Frisian, Amsterdam/Philadelphia.
- Brunner, Karl <sup>3</sup>1965: Altenglische Grammatik, Tübingen.
- Campbell, Alistair 2003 [<sup>3</sup>1968]: Old English grammar, Oxford.
- Cleasby, Richard and Gudbrand Vigfusson 1993 [<sup>2</sup>1957]: An Icelandic-English dictionary, second edition with a supplement by William A. Craigie, Oxford.

- Cordes, Gerhard 1973: Altniederdeutsches Elementarbuch, mit einem Kapitel „Syntaktisches“ von Ferdinand Holthausen, Heidelberg.
- Cordes, Gerhard u. Dieter Möhn (Hrg.) 1983: Handbuch zur niederdeutschen Sprach- und Literaturwissenschaft, Berlin.
- Dammers, Ulf, Walter Hoffmann u. Hans-Joachim Solms 1998: Grammatik des Frühneuhochdeutschen, 4. Band, Heidelberg.
- Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm, 33 Bde., Nachdruck der Erstausgabe, 1984 [1854-1984], München.
- Duden Bd. 7, das Herkunftswörterbuch, 5. neu bearbeitete Auflage, 2013 Berlin/Mannheim/Zürich.
- Einarsson, Stefán 1973: Icelandic, Baltimore and London, The Johns Hopkins University Press.
- Feist, Sigmund <sup>3</sup>1939: Vergleichendes Wörterbuch der gotischen Sprache, mit Einschluß des Krimgotischen und sonstiger zerstreuter Überreste des Gotischen, Leiden.
- Fulk, R.D. 2018: A comparative grammar of the early Germanic languages, Amsterdam/Philadelphia.
- Gallée, Johan Hendrik <sup>3</sup>1993: Altsächsische Grammatik, Tübingen.
- Goossens, Jan (Hrg.) 1983: Niederdeutsch, Sprache und Literatur, eine Einführung, 2., verbesserte und um einen bibliographischen Nachtrag erweiterte Auflage, Neumünster.
- Grosse, Rudolf (Hrg.) 2007: Althochdeutsches Wörterbuch, Reprint der Bände I-IV, Berlin.
- Gutenbrunner, Siegfried 1951: Historische Laut- und Formenlehre des Altisländischen, Heidelberg.
- Hansen, Aage 1962: Den lydligje udvikling i dansk, fra ca. 1300 til nutiden, 1. vokalismen, København.
- 1971: Den lydligje udvikling i dansk, fra ca. 1300 til nutiden, 2. konsonantismen, København.
- Haugen, Einar 1974 [1965]: Norsk engelsk ordbok, nytt amerikansk opplag med tillegg og rettelser, University of Wisconsin press.
- 1982: Scandinavian language structures, a comparative historical survey, Tübingen.
- van Halten, Willem Lodewijk 1890: Altostfriesische Grammatik, Leeuwarden.
- Heusler, Andreas <sup>7</sup>1967: Altisländisches Elementarbuch, Heidelberg.
- Hirt, Hermann 1931: Handbuch des Urgermanischen, Teil I, Laut- und Akzentlehre, Heidelberg.

- 1932: Handbuch des Urgermanischen, Teil II, Stammbildungs- und Flexionslehre, Heidelberg.
- Hofmann, Dietrich u. Anne Tjerk Popkema 2008: Altfriesisches Handwörterbuch, unter Mitwirkung von Gisela Hofmann, Heidelberg.
- Holmes, Philip and Hans-Olav Enger 2018: Norwegian, a comprehensive grammar, London and New York, Routledge.
- Holmes, Philip and Ian Hinchliffe 2003: Swedish, a comprehensive grammar, second edition, London and New York, Routledge.
- Holthausen, Ferdinand <sup>3</sup>1974: Altenglisches etymologisches Wörterbuch, Heidelberg.
- Holthausen, Ferdinand u. Dietrich Hofmann 1985: Altfriesisches Wörterbuch, zweite, verbesserte Auflage, Heidelberg.
- Kluge, Friedrich <sup>24</sup>2002: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache, bearbeitet von Elmar Seebold, Berlin/New York.
- Köbler, Gerhard 1989: Gotisches Wörterbuch, Leiden.
- 1993: Wörterbuch des althochdeutschen Sprachschatzes, Paderborn.
- Krahe, Hans <sup>2</sup>1967: Historische Laut- und Formenlehre des Gotischen, bearbeitet von Elmar Seebold, Heidelberg.
- <sup>7</sup>1969a: Germanische Sprachwissenschaft I, bearb. von Wolfgang Meid, Berlin.
- <sup>7</sup>1969b: Germanische Sprachwissenschaft II, bearb. von Wolfgang Meid, Berlin.
- Krause, Wolfgang <sup>3</sup>1968: Handbuch des Gotischen, München.
- 1971: Die Sprache der urnordischen Runeninschriften, Heidelberg.
- Kress, Bruno 1982: Isländische Grammatik, Leipzig, VEB Verlag Enzyklopädie (Lizenzausgabe des Max Hueber Verlages, München).
- Kuryłowicz, Jerzy 1969: Les verbes germaniques du type lūkan, in: Mélanges Fourquet, Paris/München.
- Lehmann, Winfred P. 1986: A Gothic etymological dictionary, Leiden.
- Lexer, Matthias 1992: Mittelhochdeutsches Handwörterbuch, 3 Bde., Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1872-1878, Stuttgart
- Mitchell, Bruce and Fred C. Robinson 2001: A guide to Old English, sixth edition, Blackwell Publishing.
- Moser, Virgil 1929: Frühneuhochdeutsche Grammatik, 1. Band, 1. Hälfte, Heidelberg.
- Mossé, Fernand 1969 [<sup>2</sup>1956]: Manuel de la langue gotique, Paris.
- Noreen, Adolf 1904: Altnordische Grammatik II, Altschwedische Grammatik, mit Einschluß des Altgutnischen, Halle.
- <sup>5</sup>1970: Altnordische Grammatik I, Tübingen.
- Paul, Hermann 1968 [1916], Deutsche Grammatik, Band I, Tübingen.
- 1968 [1917], Deutsche Grammatik, Band II, Tübingen.

- <sup>23</sup>1989: *Mittelhochdeutsche Grammatik*, neu bearbeitet von Peter Wiehl und Siegfried Grosse, Tübingen.
- Pétursson, Magnús 1978: *Isländisch*, Hamburg, Helmut Buske Verlag.
- Pfeifer, Wolfgang et al. 1989: *Etymologisches Wörterbuch des Deutschen*, Berlin.
- Prokosch, Eduard 1939: *A comparative Germanic grammar*, Linguistic society of America.
- Ranke, Friedrich u. Dietrich Hofmann <sup>4</sup>1979: *Altnordisches Elementarbuch*, Berlin/New York.
- Reichmann, Oskar u. Klaus-Peter Wegera (Hrsg.) 1993: *Frühneuhochdeutsche Grammatik* von Robert Peter Ebert, Oskar Reichmann, Hans-Joachim Solms und Klaus-Peter Wegera, Tübingen.
- Ringe, Don 2006: *From Proto-Indo-European to Proto-Germanic (A linguistic history of English, volume I)*, Oxford University Press.
- Ringe, Don and Ann Taylor 2014: *The development of Old English (A linguistic history of English, volume II)*, Oxford University Press.
- Schützeichel, Rudolf 2006: *Althochdeutsches Wörterbuch*, 6., Auflage, überarbeitet und um die Glossen erweitert, Tübingen.
- Seebold, Elmar 1970: *Vergleichendes und etymologisches Wörterbuch der germanischen starken Verben*, The Hague.
- Sehrt, Edward H. 1966: *Vollständiges Wörterbuch zum Heliand und zur altsächsischen Genesis*, 2. durchgesehene Auflage, Göttingen.
- Seip, Didrik A. 2012 [1971]: *Norwegische Sprachgeschichte*, bearbeitet und erweitert von Laurits Saltveit, Berlin/New York.
- Siebs, Theodor 1901: *Geschichte der friesischen Sprache*, in: *Grundriß der germanischen Philologie*, herausgegeben von Hermann Paul, Bd.1, 2. Auflage, Straßburg.
- Sjölin, Bo 1969: *Einführung in das Friesische*, Stuttgart.
- Skautrup, Peter 1968 [1944]-1970: *Det danske sprogs historie*, 5 bind, Gyldendalske boghandel, Nordisk forlag.
- Splett, Jochen 1993: *Althochdeutsches Wörterbuch*, 2 Bde., Berlin/New York.
- Streitberg, Wilhelm <sup>4</sup>1974: *Urgermanische Grammatik*, Heidelberg.
- 2000a: *Die gotische Bibel*, Band 1, der gotische Text und seine griechische Vorlage, 7. Auflage, Heidelberg.
- 2000b: *Die gotische Bibel*, Band 2, Gotisch-Griechisch-Deutsches Wörterbuch, 6. Auflage, Heidelberg.
- de Tollenaere, Felicien and Randall L. Jones 1976: *Word-indices and word-lists to the Gothic bible and minor fragments*, Leiden.

- de Vries, Jan 1977: *Altnordisches etymologisches Wörterbuch*, Leiden.
- Wessén, Elias 2012 [1968]: *Die nordischen Sprachen, deutsche Fassung der schwedischen Ausgabe von Suzanne Öhman*, Berlin.
- 2012 [1970]: *Schwedische Sprachgeschichte, Band 1, Laut- und Flexionslehre, deutsche Fassung der schwedischen Ausgabe von Suzanne Öhman*, Berlin.
- Wright, Joseph 1981 [1910]: *Grammar of the Gothic language, second edition with a supplement to the grammar by O. L. Sayce*, Oxford University Press.
- Wright, Joseph and Elizabeth Mary Wright 1984 [1925]: *Old English grammar, third edition*, Oxford University Press.
- Zoëga, Geir T. 1981 [1910]: *A concise dictionary of Old Icelandic*, Oxford.